

# 朱天心「想我眷村的兄弟們」にみる限定的な「私たち」

赤松美和子

## 一 はじめに—「古都」について

「まさか、あなたの記憶が何の意味もないなんて……」これは、朱天心「古都」の導入部分である。

「古都」は、一九九七年麥田出版より「当代小説家」シリーズ第六冊として出版された。九七年度の行政院新聞局図書出版金鼎獎、「中国時報」十大好書、「聯合報」最佳書獎を受賞、第二十一回時報文学獎推薦獎も受賞した。日本でも清水賢一郎の訳により、二〇〇〇年に国書刊行会より「新しい台湾の文学シリーズ」の一冊として刊行された。

主人公は中年女性の「あなた」であり、二人称語りの小説である。同名川端康成『古都』の双子の物語をモチーフに、異国の京都と日本占領下の台北を双子の都市として、京都の永遠性と台北の刹那性を対比させ描いている。こうした二項対立の構図が、「あなた」の記憶への問いかけにより次第に揺るがされていく。

この冒頭の「まさか、あなたの記憶が何の意味もないなんて……」について、黄英哲は「いわゆる「大歴史」への問いかけであり、「大叙述」をひっくり返そうという意図もはっきり示されている。」「決して誰の記憶に意味が

あるのかなどと言明はしていない。「皇民精神」を注入した日本政府の記憶なのか、「反共抗ソ」を注入して祖国大陸の山河を光復させようとした国民政府の記憶か、それとも「愛台湾」を植え付けようとした本土論や政治権力を有する政府の記憶かといったことはいわなのだ<sup>(1)</sup>と指摘している。また訳者の清水賢一郎が「朱天心文学の核心を構成しているのは、こうした〈記憶〉と〈アイデンティティ〉に対するある種の躓き、そしてそこから発せられる問い直しの姿勢である」<sup>(2)</sup>、更に邱貴芬が、「全ては朱天心の閉鎖恐怖症と関係あるようだ。(台湾、女性)といった定位がもたらしたかもしれない閉ざされた空間から逃避するために、朱天心は自らを放逐する戦術を選んだ」<sup>(3)</sup>と指摘しているように、「古都」は、新たな台湾本土化ナショナリズムの「大きな物語」に対抗する外省人第二世代という他者による抵抗というよりは、「自己と他者の境界を不断に引き直し、あらゆる時空間から自己と他者との二項対立関係を壊していこうとする」<sup>(4)</sup>ポストモダン小説として受け入れられた。

一方、黄英哲は「朱天心自身も自ら気付かないうちに、過去の記憶の栄光を守ろうとしている」<sup>(5)</sup>と指摘し、また梅家玲が「古都」を「これまでの朱の創作における『集大成』である」とした上で、更に「今日眷村小説の国家イメージ問題について討議する際、最も注目すべきテキストである」<sup>(6)</sup>、「眷村エクリチュールの積極的な意義を論ずると、年長者の戦争の記憶や郷愁のイメージを再現し、特定の族群文化を作るといふ継続の意味より、この「原郷」と「現実」の間での離散と移住こそが、サイドのいう「ディアスポラ」の特質のようなものを眷村作家に備えさせている。これらの眷村作家は「ダブルパースペクティブ」を経て互いに透視し、外界と自己に対するより深い観照と反省が可能になり、多面的な時代の変遷と国家の移り変わりの証人になった」<sup>(7)</sup>と指摘しているように、梅家玲は、「古都」にみられた「ダブルパースペクティブ」という特質を、眷村生まれの作家の特徴として根拠付けている。

筆者は、朱天心の眷村出身の作家という特質が、「自己と他者の境界を不断に引き直し、あらゆる時空間から自己と他者との二項対立関係を壊していこうとする」という「古都」のようなポストモダン小説をいきなり生み出したのではなく、まず、自己と他者を認識する作業が小説を書く過程で行われ、それが眷村を書くことだったのではないかと予測している。そこで、朱天心の作品の中で眷村小説を最も直接的に描いた「想我眷村的兄弟們」を分析することで、その一端を明らかにし、戒嚴令解除後の小説、並びに朱天心文学の集大成と言われる「古都」を理解する礎としたい。

## 二、眷村と眷村作家と眷村小説と朱天心

眷村とは、「五六年から政府が建設・設置していった軍人家族を集住させた集合住宅区である。眷村は六七年年で十期に分けて建設が行われ、この年、全台湾の眷村居住世帯数は八万七千二百五十八戸であり、一家族あたり家族数が平均五人とすると、当時の外省人数の約四分の一が、眷村に居住していたことになる」<sup>(8)</sup>。

朱天心は、一九五八年、台湾高雄鳳山の眷村で生まれた。朱天心以外にも、姉の朱天文（一九五六―）、張大春（一九五六―）を始め、蘇偉貞（一九五四―）、袁瓊瓊（一九五〇―）、張啓疆（一九六一―）、苦苓（一九五五―）、孫瑋芒（一九五五―）など眷村出身の作家は多く、彼らのほとんどは一九五〇年代生まれである。眷村生まれの彼らにとって、眷村を描くことが唯一の創作手段ではないものの、戒嚴令解除前後に、眷村を描いた小説や随筆が多数発表されている。よって彼らは、時に「眷村作家」と称されることもあり、眷村を描いた小説が「眷村小説」と呼ばれることもある。例えば朱天文「エデンはもはや」（一九八二・第五回時報文学獎）、張大春「將軍碑」（一九八六・第五回洪醒夫小説獎・第九回時報文学獎）、「四喜憂国」（一九八八・第十二回中興文藝獎）、蘇

偉貞「有縁千里」(一九八四)、袁瓊瓊「今生縁」(一九八八)、張啓疆「眷村」(一九八五・第五回全国学生文学奨)・「消失的球」(一九九二・第四回中央日報文学奨)等も時に「眷村小説」と呼ばれ、文学賞受賞作も多い。<sup>(9)</sup>

「古都」の主人公も眷村出身であるが、朱天心作品の中で、真正面から眷村を描いたのが「想我眷村的兄弟們」(一九九一)である。蘇偉貞編集の眷村作品集『臺灣眷村小説選』(二魚文化、二〇〇四年)の冒頭作品として所収されていることから、朱天心作品としてのみならず、この小説が「眷村小説」の代表的作品として位置づけられていることが看取できる。

次に、朱天心について若干解説を加えたい。朱天心は、軍人作家である外省人の朱西寧を父に、日本語文学の翻訳家である本省人(客家系)劉慕沙を母に持つ外省人第二世代であり、姉朱天文、妹朱天衣もそれぞれ文壇で活躍している。夫は本省人(閩南系)である。十五歳の時、「梁小琪的一天」でデビューした。「我記得……」以降は、政治的な小説を次々と発表し、注目を集めている。朱天心が政治的テーマを書いたのは、その「我記得……」以降だといわれており、一九八四年からの潜伏期間の後発表した「我記得……」を以って、「それまでの身辺に取材した青春小説作風から一転して、現下の〈状況〉への関心を強め、政治色を濃くしている。そうした作風の変化の背景には」「台湾社会の「本土化」という激しい地殻変動があったと考えられる<sup>(11)</sup>」と訳者の清水は指摘している。その通りだと思うが、朱天心は、台北市立第一女子高級中学の同級生でもある邱貴芬との対談で、邱の「一般にあなたの創作生活の発展は一九八七年出版の「我記得……」を分水嶺と評価したものが多く<sup>(12)</sup>」、「私はあなたの創作の風格の変化の問題について、戒厳令解除が大きな役割を果たしているように思うのですが？」<sup>(13)</sup>という問いに対し、朱は「私に比較的大きな影響を与えたのは郷土文学論争だろうと思います<sup>(14)</sup>」、「今思いますに、彼らがしたのは文学ではなく、政治上の主張でした、ただ私たちは間に合いませんでした。ですが、この論戦は私の考え方に

大きなショックを与え、例えば、私は党外雑誌を読み始めました（中略）私の模索過程は十年に及んだのです<sup>(15)</sup>と答えている。

一九七〇年代、「黄春明、陳映真、王拓、楊青矗等の作家のリアリズム文学の色彩が強い小説や小説集が続々と出版されると、時局の動揺と相呼応して、台湾の文学場全体が徐々に二つの陣営に分かれ始め、台湾文学はどの方向へむかうべきなのか、何を台湾郷土文学と呼ぶのかといった課題が論議され始めた<sup>(16)</sup>」。こうして一九七六年に始まった郷土文学論争では、「郷土文学」に対する様々な解釈を通じて、ローカリズムに通じる「郷土回帰」が注目されたが、それだけでなく、この論争で注目されたあらゆる解釈は、一九七〇年代の思想動向の主流が「台湾における中国人」「台湾における中国文学」といった「台湾と中国の多元的重層的把握」を可能とさせる民族主義の潮流の下で展開したことを示すものであった<sup>(17)</sup>。この郷土文学論争は、当時二十歳で少女作家として活躍していた朱天心に大きな影響を与え、彼女の作風を変えていったと思われる。このように七〇年代後半に起こった郷土文学論争は、戒嚴令解除後に発表された小説にも影響を与えていく。

### 三、「想我眷村的兄弟們」について

「想我眷村的兄弟們<sup>(18)</sup>」は、一九九二年に小説集『想我眷村的兄弟們』に所収され、麥田出版の創業事業の一環として出版された<sup>(19)</sup>。創業事業として、朱天心をコメンテーターに迎え、全国で座談などキャンペーンを行ったことは画期的であり、その甲斐あつてか、金石堂の一九九二年最も影響のあつた書籍として選ばれている<sup>(20)</sup>。また同年の時報文学奨も獲得した。

王徳威が「朱天心は論文体の「想我眷村的兄弟們」（一九九一）を独創し、ある族群の消えていく集団的記憶を

呼び覚ました<sup>(22)</sup>と指摘しているように、この短編小説では、これまであまり描かれることのなかった消え行く眷村と眷村に暮らした人々を、物語の背景としてではなく中心として描いている。小説の前半は、眷村の生活と変遷、また眷村と眷村以外の人々の生活との違いが、語り手「私」に「彼女」と呼ばれる少女の淡く切ない青春時代の思い出として、断片的に情緒的に描かれている。一方後半では、「少女」は「あなた」と呼び換えられる。眷村に生きた兄弟たちとの記憶は、現在につながる、忘れてはならぬものとして、今では離れ離れとなってしまう眷村の兄弟たちの足跡を捜し求め、彼らの実名を書き連ね、物語は終わる。

(1) 三人称「彼女」から二人称「あなた」へ

「想我眷村的兄弟們」は語り手「私」による一人称小説である。小説の前半は、語り手に「彼女」と呼ばれる少女の記憶を通して、眷村での生活が、淡く切なくノスタルジックに描かれる。中国大陸から渡ってきた軍人の集住地として一括りにされがちな眷村も、住人にとっては、中国各省出身者の寄せ集めであり、陸・海・空・情報など各軍の家族が共同生活を行う異種混浴した空間であった。出身地による食べものなど生活習慣の違いや、各軍のおかれた生活や経済状況の違いなどは、江西人、四川人、浙江人、広東人、山東人のげっぶの臭いの違い、また陸軍、海軍、憲兵軍、情報軍のそれぞれの妻たちの特徴の違いとして描かれている。また、軍人の夫が帰ってこない妻たちの孤独、身寄りのいない老兵に強姦された少女たちなど、甘美な思い出というより、切なく辛い思い出として断片的にノスタルジックに描かれている。

小説はこうした少女の切なくも安全な思い出の物語として進んでいくかに思われた。しかし、小説の半分以上が過ぎたところで次の段落を以って、思い出のセピア色の写真が現実のカラーの動画に変わるように、物語は攻

撃的に動き始める。

本省人の男と結婚し、生活の中に時折うまくいかないと感じる人も数としては多い——例えば夫たちはどうして記憶の中の外省人の男の子みたいに家事を分担してくれないのだろう、きっと日本植民地時代の亭主関白の影響に違いないとか、選挙のたびに、彼女は仕方なく国民党の肩を持って夫と論争し、あやうく家内紛争になるところだったり——そのため時たま、ああ、あの日の眷村の男の子たちはどこへ行ってしまったのと寂しく思い出す女の子たち。**私**は心からの理解と同情の余り、**あなたたち**に指摘せざるを得ない、**あなた**がかつて、眷村を、この土地を、何としてでも、どんなに離れたいと思ったか忘れないで、と。

**あなたは**…(中略)…を覚えていらっしゃるだろうか？(中略)

覚えてるだろうか？**あなたは**…(中略)…を。(下線等筆者)(八二頁)

張誦聖は、眷村文学について「初期は個別の作家の幼いころの思い出に過ぎなかったが、またたく間に特定の族群——外省人第二世代作家を指す——の政論議題の発表へと変わった」と指摘している。その眷村文学の大きな流れが一篇の短編小説、正にこの段落内部において体现されたといえる。中でも最も注目すべきは、**私**は心からの理解と同情の余り、**あなたたち**に指摘せざるを得ない、**あなた**がかつて、眷村を、この土地を、何としてでもどんなに離れたいと思ったか忘れないで。(不要忘る**妳**曾經多麼想離開這個小村子，這塊土地，無論以哪一種方式)という一文によって、三人称の「彼女」はいつのまにか「あなたたち」の一人「あなた」として呼び替えられ、物語の最後まで「私」は「あなた」を呼び続ける。これまで遠い向こうにあつた「彼女」の思い出は、ただ断片的に語られるノスタルジックなものから、「**あなた**…(中略)…を忘れないで(不要忘る妳…(中略)…)」、「**あなたは**…(中略)…を覚えていらっしゃるだろうか？(記不記得妳…(中略)…)」と、忘れてはならない大切な記憶と

して位置づけられる。

人称の問題について、謝春馨は「決して作者は物語る技術が劣っているのではない。読者は「朱天心」（私）の心の声だと分かっているから、「彼女」であろうと「あなた」であろうと重要ではない。いずれにしてもどちらも「私」（朱天心）に違いない！「彼女」・「あなた」の混同から作者の「焦慮」が露になっている<sup>(24)</sup>と指摘している。しかし、この「彼女」と「あなた」は小説内において、混在して用いられているわけではなく、「私」は心からの理解と同情の余り、あなたたちに指摘せざるを得ない、あなたがかつて、眷村を、この土地を、何としてでも、どんなに離れたいと思つたか忘れないで。」を含む一文を通して、「彼女」から「あなた」へ明らかに呼び換えられており、混同ではなく、作家が意図的に混同したように書き換えたことが看取できる。

例えば、劉亮雅が「語り手は国民党に対して愛憎矛盾に満ちており、一旦「他人」が国民党を批判すれば、逆に弁護しないではいられない<sup>(25)</sup>」と言及しているように、この小説には、国民党、眷村を巡り、消化しきれない複雑な愛憎が書き込まれている。それは、同じ人物を、ここにはいない三人称「彼女」と呼ぶときと、目の前にいる二人称「あなた」と呼ぶときの違いのように、語り手「私」の立ち位置の揺れを表出しているのではないだろうか。謝が指摘するように「彼女」であろうと「あなた」であろうと重要ではない<sup>(26)</sup>のではなく、「彼女」と呼んだり、「あなた」と呼んだりするその揺れ、その変化を敢えて小説中に表していることこそが重要なのだ。例えば、本省人の夫が国民党の悪口を言うとき、主人公は次のような複雑な気持ちになると書かれている。

あなたが党を恨む気持ちは、（中略）往々にして夫が党を恨む気持ちを遙かに超えている。だが、…（中略）  
…誰かが全く無責任に、痛快に国民党を非難するのを聞いたら、…（中略）…あなたは党の弁護をしてしまうだろう。そして同時に、その人たちが何の気兼ねもなく気が済むまで悪口を言えるのを心底羨むのだ。



更に、「彼女」から「あなた」への呼び換えは、小説内に流れる時間にも影響を与えた。**あなたは……**(中略)……を覚えているだろうか？(記不記得)……(中略)……と呼びかけられる対象の「あなた」は、ここにはいない過去の「彼女」ではなく、目の前にいる現在を生きる「あなた」であり、「私」と「あなた」の距離は三人称から二人称へとぐっと縮まる。そしてこの呼び換えによって、眷村での生活が、決して過去のことではなく、現在の彼女のアイデンティティを決定付ける、現在に繋がるものであることが露にされるのだ。

小説は、次のように終わる。

**みなさん始めよう(我們開始吧)。**

びつくりしないで。一軒目の家の裏庭で真面目にウエイトトレーニングに励んでいるのは、そう、李立群だ。息を弾ませる以外何の音も立てていない、だから灯りの下で勉強している隣家の高希均や向かいの陳長文、金惟純、そして趙少康の邪魔になっていない。

**私たちは声をひそめて通り過ぎる(我們悄聲而過)。**この何軒かは結構面白い。あのゴーゴードダンスのミニスカートを穿いて英語の歌を練習しているのは欧陽菲菲だ。……(中略)……

見とれてないで！ほら、五軒目の家で小さな電球の下でこっそり小説を読んでいる女の子も可愛い。彼女は張曉風か愛亜、または韓韓あるいは袁瓊瓊か馮青、それか蘇偉貞か蔣曉雲、じゃなかったら朱天文のようだが(年齢順)、とにかく小さすぎて誰だか分からない。

もちろん物語を読むのが好きなのは女の子だけではない。**私たちは**一軒とばしてその次の家に行くと、男の子が本を読んでいるのが見えるだろう。なあに？蔡詩萍と苦苓の区別もつかないの？そのどちらでもない、

張大春だ。だから「**私たち**」はさつきと通り過ぎる。でないと山東弁で悪態つかれてしまう。そう、彼は小さいころからこんな風だったのだ。…(中略)…

九軒目の家では、一人の小玲がお風呂で黙々と身体を洗っている。…(中略)…  
十一軒目の家は…

(「**離れがたい私たち**」一人は、夢の中で会いましょう)

…

ああ!

眷村の兄弟たちよ。(下線等筆者)(八九—九〇頁)

文中に挙げられている固有名詞は全て実在の人物で、作家や歌手など台湾内外で活躍する眷村出身者、つまり「あの眷村の男の子たちはどこへ行ってしまったの」という呼びかけにより捜される「想我眷村的兄弟們」である。これについて呂正恵は「朱の眷村への追憶は白先勇「台北人」に書かれているように、感傷的な美化に満たされ、客観的でないように感じられる。こうした溺情と文中に露になったアイデンティティの危機の結合は、外省人第二世代が台湾の政局急変後の特殊な体験を反映している」と評している<sup>(26)</sup>。そこで(2)では「**私たち**」という人称に注目して引き続き検討していきたい。

## (2) 「**私たち**」から「**私たち**」へ

(1) では、終焉部分を抜粋したが、語り手「私」が「彼女」を通して、眷村での思い出を描く前に、小説は、張愛玲が「沈香屑 第一炉香」において香炉に沈香屑を焚くよう読者に求めたように、次のように始まる。

あなたにお願いがある。この小説を読む前に少しばかりの準備をしてほしい（中略）あなたに「スタンド・バイ・ミー」をかけてほしいのだ。そう、映画になったステイブ・キングの同名小説（中略）聞かないのはあなたの損だと思う。では、協力者の読者のみなさん始めよう（我們開始吧）。

小説の冒頭における「あなた」は読者への呼びかけであり、「皆さん（我們）始めよう」の「私たち」は、読者を含む「私たち」である。しかし、（I）で論じた「彼女」から「あなた」の書き換えにより、いつのまにか語り手「私」と眷村出身の少女「あなた」はあまりに接近し過ぎ、いつのまにか「私たち」の一人であったはずの読者の入り込む余地はなくなる。小説の終焉で、「皆さん（私たち）始めよう」と、読者は再び「私たち」の一人として参加を求められる。しかし終焉部の最後において、「離れがたい私たち二人は、夢の中で会いましょう。……ああ、眷村の兄弟たちよ。（我倆臨別依依，要再見在夢中……啊！想我眷村的兄弟們）」と、「私たち」は、語り手の「私」と呼びかけられていた眷村出身の「あなた」に限定され、「我眷村的兄弟們」でない読者は、果てしなく置いていかれる。

そして、語り手の「私」は、これまで微妙な距離を持つ他者であった「彼女」から目の前に居る「あなた」と呼び換え距離を縮め、最後には、「私たち」「眷村的兄弟們」という集団的アイデンティティを獲得し、「眷村的兄弟們」の一人として、高らかに宣戦布告することにより、ようやく揺るぎ無い自己としての固体を確立するのだ。「古都」のような自己と他者の境界を揺るがす自由なアイデンティティを描いた小説の前に、このように徹底的に集団的アイデンティティを創出することで、自己と他者とを明確に意識した小説を朱天心は書いていた。

#### 四 おわりに

朱天心「古都」はポストモダン小説として内外で高い評価を得たが、その前段階の作品として、「想我眷村的兄弟們」を捉え分析した。小論では、とりわけ「想我眷村的兄弟們」における人称の書き換えに注目し、個人的アイデンティティが、「想我眷村的兄弟們」という集团的アイデンティティの中に布置され確立していることについて考察した。

語り手は、物語の中間において、眷村での生活を語る媒体である少女の呼称を「彼女」から「あなた」へと呼び換え、眷村での生活が、決して過去のことではなく、現在の彼女のアイデンティティを決定付ける、現在に繋がるものであることを表す。

物語の終焉において、語り手は「私たち」という呼称を多用する。その「私たち」の対象は、読者を含む開かれた「私たち」から、最後は「眷村的兄弟們」に限定された閉ざされた「私たち」へと変わる。そして「眷村的兄弟們」でない読者は置いていかれる。「私」の物語を書き、「私たち」の物語を読者に解読させるのではなく、小説中において既に「私たち」という人称を、しかもこうした限定的な「私たち」という集团的アイデンティティを書いてしまう神話の創出こそ、台湾における戒嚴令解除後の小説の一つの大きな特徴ではないだろうか。

このように小説中で、「自己と他者の境界を不断に引き直し、あらゆる時空間から自己と他者との二項対立関係を壊していこうとする試み<sup>(27)</sup>」という「大きな物語」の解体を試みると同時に、「小さな物語」を書こうとしても、それに満足することなく、常に「大きな物語」を創出、再構築し、その中に自己を布置することしかできない小説の書き方に、戒嚴令期に三民主義という「大きな物語」による文学教育を受け、二十代に郷土文学論争を経験

し、三十代に戒嚴令解除を迎えた世代の、「大きな物語」への依存、執着、そして「私たち」という限定的かつ密接な集団を表現することへの欲望を看取できるのではないだろうか。

### 注

- (1) 黄英哲「歴史・記憶とディスクール——朱天心『古都』論」『言語文化』第八巻第一号 阪口直樹先生追悼号（同志社大学言語文化学会、二〇〇五年）三〇—三二頁。
- (2) 清水賢一郎「記憶」の書『古都』（国書刊行会、二〇〇〇年）三一—三五頁。
- (3) 邱貴芬「想我放逐的兄弟（姐妹）們：閱讀第二代「外省」〈女〉作家朱天心」『中外文学』二十二巻第三期（一九九三年八月）一〇五頁。
- (4) 本橋哲也 成田龍一「ポストコロニアル——「帝国」の遺産相続人として」R・ヤング『ポストコロニアリズム』（岩波書店、二〇〇五年）二二—二七頁。
- (5) 黄英哲「歴史・記憶とディスクール——朱天心『古都』論」（前掲）三四頁。
- (6) 梅家玲「八、九〇年代眷村小説（家）的家國想像與書寫政治」『性別、還是家國？五〇與八、九〇年代台灣小説論』（麥田、二〇〇四年）一七〇頁。
- (7) 梅家玲「八、九〇年代眷村小説（家）的家國想像與書寫政治」（前掲）一八二頁。
- (8) 若林正文「戦後台湾遷占者国家における「外省人」——党国体制下の多重族群社会再編試論・その一」『東洋文化研究』第五号（学習院大学東洋文化研究所、二〇〇三年三月）一三三頁。
- (9) 梅家玲「八、九〇年代眷村小説（家）的家國想像與書寫政治」（前掲）一八四頁。蔡淑華「眷村小説研究——以外省第二代作家為對象」（政治大學碩士論文、一九九九年）一二九—一三九頁。及び「当代文学史料系統」<http://lit.ncl.edu.tw/>（二〇〇七年九月三日アクセス）を参照した。
- (10) 日本語訳：三木直大訳「記憶の中で」『台北ストーリー』所収（国書刊行会、一九九九年）。

朱天心「想我眷村的兄弟們」にみる限定的な「私たち」

- (11) 清水賢一郎「記憶」の書（前掲）三二八頁。
- (12) 邱貴芬「(不) 同國女人」聒噪（元尊文化、一九九八年）一二八頁。
- (13) 邱貴芬「(不) 同國女人」聒噪（前掲）一三〇頁。
- (14) 邱貴芬「(不) 同國女人」聒噪（前掲）一三一頁。
- (15) 邱貴芬「(不) 同國女人」聒噪（前掲）一三二—一三三頁。
- (16) 葉石濤著、中島利郎・澤井律之訳『台湾文学史』（東方書店、二〇〇〇年）一四六頁。
- (17) 菅野敦志「戦後台湾における文化政策の転換点をめぐって」『アジア研究』五一（三）（アジア政経学会、二〇〇五年七月）五五頁。
- (18) 本稿では、朱天心『想我眷村的兄弟們』（麥田、一九九八年、二版）を底本とした。また、日本語訳本、問ふさ子『二つの家郷のはざままで』（藍天文芸出版社、一九九三年）を参照した。
- (19) 「蘇林」（作家&出版人）轉位的作家出版人『聯合報』一九九四年五月十九日。
- (20) 「蘇林」（作家&出版人）轉位的作家出版人『聯合報』一九九四年五月十九日。
- (21) 『聯合報』一九九三年二月十一日。
- (22) 「台湾現代小説史研討會特輯（下）典律的生成 小説爾雅三十年」『聯合報』一九九七年十二月二六日。
- (23) 「朱天文與台湾文化及文學的動向」『文學場域的變遷—當代台湾小説論』（麥田、二〇〇一年）九一頁。
- (24) 「你我她（他）還是誰誰誰？—評朱天心《想我眷村的兄弟們》」『台湾文学評論』五卷四期（二〇〇五年十月）一三五頁。
- (25) 劉亮雅「後現代與後殖民」『後現代與後殖民：解嚴以來台湾小説專論』（麥田、二〇〇六年）七八頁。
- (26) 「怎麼樣的「後現代」？—評朱天心《想我眷村的兄弟們》」『戦後台湾文學經驗』（新地文學出版社、一九九五年）二八三頁。
- (27) 本橋哲也 成田龍一「ポストコロニアル—「帝国」の遺産相続人として」（前掲）二二七頁。